「地域対応の耐水防湿対策」セミナーで行われた講座内容を一部掲載!

大反響! 窓セミナー

輸入窓を使用した場合の胴縁通気工法

窓のセミナー中で講師により説明が行われた胴縁通気工法は、アメリカで徐々に普及し始めているようだ。セミナーのテーマでは、この工法で輸入窓をどのように取り付けるかが課題として取り上げられた。このコーナーでは、セッション後の質疑応答の時間帯で、特に多く出された以下の２つの質問を紹介しよう。

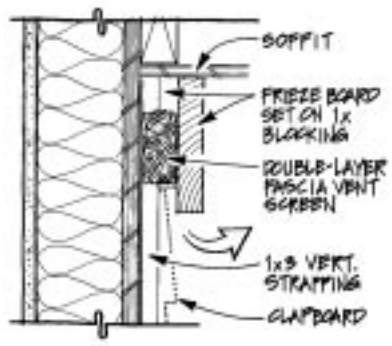
Q　胴縁通気工法で輸入窓を使用すると窓がサイディングより内側に入って凹んでしまう形になりますが、どうしたらよいでしょうか。

A　開口部の廻りに胴縁を配し、その上から窓を取り付けてください。窓枠はサイディングより出っ張る形になります。

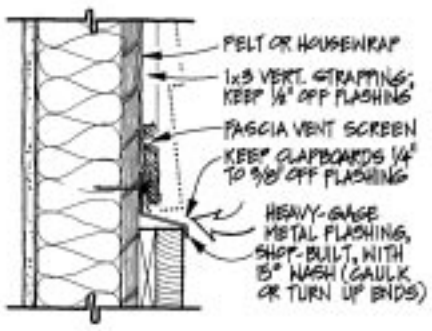
Q　胴縁通気工法での防水対策はどうしたらよいでしょうか。

A　金属性の水きりを使うか、ハウスラップを使うか、いずれかの方法で防水処理を施してください。

Rain Screen
Venting at Soffit



Venting at Window Head
or Skirt Board



上図は米国雑誌「ジャーナル・オブ・ライト・コンストラクション」４月号に掲載された詳細図

胴縁通気工法　ひとくちメモ

胴縁通気工法とは、ハウスラップの上に胴縁を設けてその上にサイディングを取り付け、外部の水分が枠組内に浸入するのを防ぐ方法である。日本では長年使われてきた方法で、特に暴風雨地帯に適している。この工法では、サイディングの背後で通気が行われ、水が引力で落ちるか、水分が対流で逃れる。どちらの場合でも構造体から水分が除かれ、構造材、合板下地材、サイディングが水に浸ることがない。窓のフラッシングを慎重に行い、窓の上から伝わってくる水分が外側へ流れ出るようにする。特別に設計されたフラッシングを使う必要がある。また、木製サイディングを使う場合は、サイディングの裏側を保護するための塗料を施さなければならない。

胴縁通気工法のもうひとつの利点がアメリカで最近発見された。ある種のサイディングや塗料の化学物質によってタイベック式のハウスラップが損傷を起こし、水分を逃すかわりに保持してしまうため、サイディングや下地材が濡れた状態になり、保護しようとする木材を傷めてしまう。通気工法を使えば、ハウスラップが化学物質に接触することなく、損傷を起こさないので、生涯ベーパーバリアとしての機能を保つことができる。

窓の正しい取り付け方

資料掲載
P10をご覧ください!

NWWDA品質保証

米国には窓の耐風圧・気密・水密などの品質を判定する組織が２つある。一つは、アルミ・樹脂窓を判定するAAMAという組織、もう一つが木製窓を判定するNWWDA（全米木製窓・ドア協会）という組織である。NWWDA協会会長であるアラン・キャンベル氏（写真）がセミナーに同行。話を伺った。

キャンベル氏が指摘したのは、現在日本では、ときおり不適合な品質の窓が使用されている、という点で、これが雨漏れのトラブルを引き起こす原因の一つにもなっているようだ。ご存じのように日本には、耐風圧・気密・水密・遮音・防火…、と各性能項目に一定の基準値が設けられ、その結果を基に、製品に対して一定の等級が与えられる制度がある。JIS規格である。アメリカでも同様の規格があり、木製窓の場合は、NWWDA協会によって決められた判定基準で等級が与えられる。例えば、水密項目の等級では、最低がDP（US Design Pressure Rating）15、最も高い等級でDP85である。風・雨ともに激しい沿岸地域などでは、DP40～45の窓を使用することが望ましいわけだが、こういった知識を持ち合わせず、等級の低い不適合な窓を使用してしまうと、雨漏れなどのトラブルを招きかねない。

木製窓を輸入する際には、メーカー側にNWWDAの等級について尋ね、輸入品を決定するときの判断材料にするのが賢明のようである。ちなみにくり返しになるが、アルミ・樹脂サッシはAAMAの基準。お間違えないように。

水　密　等　級	
日本 JIS	アメリカ NWWDA JISに相等する等級
W1	DP15
W2	DP25
W3	DP35
W3	DP45
W4	DP50
W4	DP60

（以上窓セミナー　取材・文／宮川律子＜名古屋＞）